源氏物語評釋

未摘花

六

第六帖 末摘花 評釋

帝國圖書館藏

【春上】次兼詞をもて為末名詞云 牧のの末摘花を神のゆふかけんとすれば常陸なれたもすまし

末摘花の古事をもきかるゆゑの名の名

【新】此帖は放常陸宮の古むすめをもて主人公の花の色にて不可思議の人物なるのゆへなれば万葉の紅の末摘花の名を上ゆふ房あるをその房の末ゆゑいふべし

【玉】源氏君十八の春より十九の正月までを或人宮夕顔上のうせしれ一ヶ年の秋なるゆゑ此年のはじめゆゑ人々物あらざりしを夕顔の事ゆゑ思ひ出でとあり秋の至時年の暮までの事を年月ゆゑ行ぐ〳〵いづれ若さる傷年 故常夫ゆゑ玉葛君八年の春のはじめ源氏の方ゆゑ思ひ出でゆゑの又九年の春九源氏君の御ゆゑ年へゆるむつまじさゆゑ九へ故秋君ゆゑ九年は君よりのゆゑを今年の春九御ゆゑ君ゆゑ九へ御母君ゆゑも秋より又の年此君までのゆゑをとゝのゝごろとゝのゝごろひと

【釈】其名のゆゑ故物のごとく〳〵但嘉源氏この君を秋堅をうゝる君といふ作〳〵いづれのはゝ八年程君のゆゑゆゑ〳〵語へるごとし かゝ今八年のゆゑども思ひたひてかくもうべ君を思ふ〳〵第六帖としてうゝへうゝ次〳〵なるも皆もうゝ故源ゆゑもいつるゆゑ

たゞよひくるゆゑもうゝびて名付られる物と月〳〵まゝゝゝふもひてこゝちゝ〳〵き深を思ふれゝゝ物とハ人〳〵ゝ化も又物のゝゝ作る物とハ人〳〵ゝ物をいふゆゑ末摘花ゆゑ〳〵名付られる八上の名花とお到へる物ゆゑ中ゆゑ花ゆゑ

○末つむ花

日本文庫

人殘りもなくまろうめる人を反對ふせられたる所なるさまの北方のまへおほ[illegible]
と對へ琴と琵琶と對へられたるものとなりてさまざまの[illegible]
たりとうかがひたる人々なれど又考へ給ふもあるべし[illegible]
人あり[illegible]ふんかの[illegible]もいと[illegible]のまゝ[illegible]
[illegible]

評 北方の[illegible]の反對ふて古きたる文[illegible]
のうぎりをあつめて[illegible]
[illegible]
好のかより異しの外ゆたちをしき人を引出[illegible]
いとめでたしされば初ふけるゆを[illegible]
きておぼろ月夜のをりきふあれたる所ふ[illegible]
月のかもとなきとふゆ[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]

○源氏[illegible]

[illegible]

[illegible]

の名をひあるいはくわよそ八部とぐ[ヒトフデ]ぐりをも
ちあめるこ[ヒ]ぬ[ナ]ぬ[ヒ]ぬ[ナ]ぬ[ヒ]ぬ[ナ]ぬ

兵部大輔　釈　この人者儀式の
中よりて末摘花の兄れど
くゆめゆるよう玉小櫛小委く考へ
らるべしこれ小櫛小委く考へ
父君のかたをさしてこそ

玉　ことさを父君といふる説いらじ
きひごとく指遠ふ事ましまへ
ごとく又父君を父君とのみ
あれ家れば君とのみこと
いふ例あることや　拾　上ふ以ふ兵部
大輔ありうく　餘釈三巻ノ

ひくらのみこ　釈　親王の常陸
の太守ふ任ぜられるをいふ
かくひ人　拾　平ふ人ある紀
ありばうくひ人といふ人とは
万葉ふよハ人をとう人熟ふをも
をとう人後撰も紀ふを引う人
を注ふなくやとよむ此物語の
末ふハ猫をも人とふ引きバ万ふ
ふうて似つ見る万ふいのべさま
うつのとも　阿今日北窓下飲向何所為欣然得三友三友者為誰琴罷輒举酒酒罷輒吟詩三友遍相引循環無止時一弾恨

時そ地ごろう行ふをもいうべし。かげ
のうぐれ者ふ。ふ海ハやるさやうふくを
見まわりくれがたおいるなぐりあれの
うすれをぞ。ふ。ふ。ふ

退出て紫宸殿のまへに
父のさらされ給ハ
ん事ハ世ハ
[釈] さて人の
[注] 常陸宮とハ常陸宮といふ
[注] 常陸宮ハ
[注] 常陸宮ハ
[注] 常陸宮ハ

なんぞ。あるとてこれいでいりよりたうみたる
（参り侍）イソガレキ　出　入　イウモ　未詳ふ汙
ハ〜ぬてそこちをそそ。といへどおそれは
万　ぬ　未詳ふ汙
ぬきくしこれ〜こそあるまと
イあはまきまるこそ
なるこそ。なるれ。きふめたうふ人は
禁　中　カヨフ
きくだりわやいとくめよするもあいのう。
（アルベキ）（琴ヲ）
いうぎきそんとむひつぶる。ものたかれ
未詳ふ汙　ドウマラヲカレウ
（源ノ）
あ〜〜ふたそうぷなふだりぬ
オモシロク
うたてなるねどものゆかぐれすぐこそふる
手　ワケノイガウタ　源ノイガウタ
ものまでばきてゆそもはぐされどいとい
（弁ノ）
うあれわりてはびきを所ふさばりれ
荒　甲
人のふるめりうぬをくかづたさわう
故宮　ギヤウサンニ　居
くんかごわなくいうよはものこそ
餘　光　（余ツメノ）シンキニ思ヒクヽハヌコガ

の侍りて所も様さかぐある伝
いつ侍りり物をそひ物そそひと
さもぐふ物をそひ物そそひと
りふそひよ物をそ〜〜ある伝をふ此
詞をそ伝をそ〜〜まそ旨注ハ
いケドに伝ひぶ〜と
むり〜物河〜し　家　若物伝の
冊ふ物をもかやうの所ふ〜そ
あ〜れ物ある本ともハあり名まと
ひい合をのあ〜伝をふ引まる
うつ物の伝後ぶむまあ物のと
ぶふよりありてハ物れど必も
彼よ〜りるふハあ物ぶ〜ぶる
物伝とまこんてあるべ
（細）今ぬ
今ぬ物どけるのあそ
伝ま〜ひ〜て大〜ふひ〜せまあ
ら物まるあり
くりぶちふ物あり　風　物月
物の伝をふ物の所もゆるびて
ま〜みあべき物のまるあ物ぶ〜ま
まらぶ〜どのこんと伝ぶつる
家　客人の者んと中つると句ふあ
ら物ハ〜ひ〜ひ〜ひ〜ひ〜ひ〜ん伝ふ
物て伝る〜今ふまてのどやた

なんぞあるとてこれいでいりよりたうみたる
（参り侍）イソガレキ　出　入　イウモ　未詳ふ汙
ハ〜ぬてそこちをそそ。といへどおそれは
万　ぬ　未詳ふ汙
ぬきくしこれ〜こそあるまと
イあはまきまるこそ
なるこそ。なるれ。きふめたうふ人は
禁　中　カヨフ
きくだりわやいとくめよするもあいのう。
（アルベキ）（琴ヲ）
いうぎきそんとむひつぶる。ものたかれ
未詳ふ汙　ドウマラヲカレウ
（源ノ）
あ〜〜ふたそうぷなふだりぬ
オモシロク
うたてなるねどものゆかぐれすぐこそふる
手　ワケノイガウタ　源ノイガウタ
ものまでばきてゆそもはぐされどいとい
（弁ノ）
うあれわりてはびきを所ふさばりれ
荒　甲
人のふるめりうぬをくかづたさわう
故宮　ギヤウサンニ　居
くんかごわなくいうよはものこそ
餘　光　（余ツメノ）シンキニ思ヒクヽハヌコガ

あるこんぷかやうの所よこそ。むう〜物伝ふも
ひそれなるこそぐもみそそ。ぶぐ伝ひぐぎそ。
ものやいひよ〜ま〜と物ぼをどうちつけ
寄　イムナシ　クツジ
まやれぶ（余ノ）さんどんをづりく〜。やさそ〜ひ
踏　躇
ぶふ。命婦うどけるものそいぐ〜ふみ〜ふ
オ　耳　剛
させをし〜じと伝ひあれバ命婦行くりぐちふをべめう。
（会我方）客人　来　格子　（居ズハ）厩　（思ラケ）
まらう〜どれこんと伝ぐつるぷ〜ひぐふもて。
オツルカ　（兼ラヒ）　オロシ　原河
いまんのどうにをみうしきりあんどそい
ス　メズ　ナ　ナカ
〜〜もてそのうさぐ〜ぐうるをバなりつく
止　南　分　クラサ
物るぐどもやく〜めるれ。物さ〜ひ〜ぐと
ザンネン
ものとあ〜で物ぐ〜ものをまみそ〜ぐをし

兼ねとりて立てゆりまゐ作
格子あんとんをつくるあり
命婦がさはるぐるくはぐし
のぐるふをのぞハ助辞あり
なるるあるぐるそも
湖あまりふぐーさまへバうそ
きるぬよれるるぐるそもてやきぬる
てくよるる

のさまふるる 釈 ゆるぬて句
をはうてるむるまづハるる
うるるさてハをうとのるふを
のぐあるまるし又るるをるし
とつげてるむるうてハるきハ
ゆ歌のるかのるるとるかれ
考へてさぐむて

山 命婦がを
づひく 湖 ゆるるくせんとる
へるあり 釈 んるるるるるやく
止んとるひくるし
いとかけるあるうるるるふ 釈 あれ
さてるるべ孟あるあるるるふ未
抜のるぐるくひて作入るさあるよ
居のへハきのるくうとてるるる
かるるといハるるとるハ縁の歌

とゆげるるるるる。(源)ハるぐくハるぐるるるるるぐみ立
ぎくせるるるるるるるるるるとの作へどんるるてと歌へだ。(今ヤ)
命婦行 いでやいとかるるあるるるあるるるるるるるて。(消)
イヤサ
んどるるーげふゆーるるるるるるるるるる

こゝろをあぢくしきふるまひと
風男のかるふるまひとあぢく
しきといふで女のねるこゝろと
バイとすべきぞとのこゝろ
おもうこめんこうと
畑今ぬぎさるし風今婦が
命分のうへをのうへこゝろ
ちひくこゝろへやさめく
きんでんのうへに　湖末梅の
うへにとゆーくわりてすり
そげーひのはしやせんこと寝
殿のうへへ立出のうへ
すいぶいめーぐそこ
評すいぶいハ透する拙くこゝ
ろーとゆるふ荒こゝるさるつよ
すてちーゆう
ゆーけーるもにのの　湖末梅
よふゆけーしーくとゆゞりてし
うゞふつまて　湖月のこゝに
方よつきくふう
命もゆくこあれど　釈所中ゆ
も思ひてゆく不あまでこ
あゞーこにてふうぎぬ姿の
花初長姿上ふ内ゆうかふと

かゞきのうへに（カゲ）ゆちようふふよりよ（ハジノカラ）
ゆとよりゆ
ゆきてるをとこありそゆ（立在）ゆきあんこゝろ
うけゆるはにの（好色者）ゆ
よつきくくゆちうくきのへバ（就）（頭）の中ね
ありそゆ（茅屋）このゆふつゝゆちよりもゆ（禁中）（イツ）
ゆるにまうで行ひゆゝをゆやゞてゆ（ガスクニ）方ゆと
よーゞ（ショ）二條院よりもあーゞ引とれ行ひ
ゆゝ後ゆいゞちあーんと出ゞあーゞゆゞきも（ユカシウテ）中将
ゆうゆあまゞゞ（源氏）ゆ（跡）ふつゝくうゞひゆゝ（随）（窺）
あゆゆーきゆ馬よ（源氏）狩衣ゆゞゞゞれないゞし（シドケナキ）
ゆふくきゆ（来）ゆゝきゞゞゞ

釈 再案かの[illegible]

釈 大内山のすそ花をふ妻〜仁和寺の西並岡のあたりなるべし〜とさてこゝハ大内山の名をうつして禁中のすがたをうつしたるこゝろをぬとハ源氏君のかくれすがたをうつしていまゝの月ハ上まろ〜

人のそひよ〜ぬすよ 釈 ゆゝふ[illegible]

なべての人ハそひもつぬすまし[illegible]

さとゝろぬゝく 花 里ゝろぬ月のひかりをバ[illegible]

釈 里ゝろぬとハいつまの里ゝゝ[illegible]

釈 かゝゝの[illegible]

釈 かゝゝの[illegible]

原 里ゝろぬかげをバ[illegible]

のゝを[illegible]

をさせのちん[illegible]

ありさふを。(イヒ)ぞ(随)おゞん(身)ゝゝて。ゝろ〜〜(ユヒ)

ゝ事もあるべゝ。(御トモニ)後(タツカリトシカナタ)ゝさせ[illegible]

やつ(メシツレ玉ハメ)ゝ[illegible]

いでき[illegible]

みたをゝゝ[illegible]

ゝ事ゝ(中将)ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

のゝく。月[illegible]

そのゝ[illegible]

ゝぬさ(先)ゝ[illegible]

人ゝぬゝ(廊)ゝ[illegible]

[illegible]

吹すさ[illegible]

すゞ〜[illegible]

上ぞ[illegible]

[illegible]

[illegible]

はひけゞ。(甲)頭の君ゝ[illegible]

なるべし

きぐれさるのわど　評おかぶろ月といひくりからかぶはめりといふ
あかこふやとくれるるのわどいへう首尾とのひてりでこ人こめらくにはありどももて

細枕名寄ある亜衣ふ没めるこ

評人見あ廊とへる思びさる人の久きるさ侍いこをう

今くるやこうて　孟肉理より只今は出のやこうるこまるふえ　拾和名抄云兼名苑注云篇以灼反今案所謂高麗用此字訣和名古万布江除吹處而六孔之笛也

評ろのりど笛ふさあるせてえ
ゆるへる微陵はこの一段をうり出
こるりりその中ふ中撥力のるれ
事を挿こるこ八後めそれ伏線
とこるる出てさこふめでこ
法ことめて　釈このこと八比巴
筆琴ふうるずもべての陳拍の
するをしてここいこる
うちゆもはるふ　眠この肉はも

きてくぴあぐこの出ままくあるはてこきた。
なつうこれをぐ。えてむきはるぬふおの
づこかこるきてる。大らふかどとよりし
こびれげ―なわるきバ。物おめちく
たちあるたこちこて。さてさはーげに
ツガフナ　不用ラシゲ
よゆきふ―こわ。出こちくれこてきつこぬ
とこ波よ。けきれきこなんもさすがに
ぼてくゆめひこぶれあり。君こちハあり
琴　源頭中将
つるきんのゆ成れげ―いで。あいきげか
ゆきるすまひのさはあがも。やこうめ
様　哀　カハリ
をこうれ物ひはけぐけ。あこまーごとに
オモシロウ　（中将ノ）

八

八葵上の母をもる方このこ八葵のこたに心はこるあり　細中将ハ葵上ノ兄侯の人こ
ものごとびくひけど　玉拾遺よ袋笛をひくをどもるこ八云の本ハさるをるるこども見る
こ八いここ見ふり俗をよびこをバりつもこ糟をこ―てつひふけどもといふやこのこく
既のこんこりけこる成こ　細中将ふ既このむりけこるをめてこるのこて原へこてこひなるこ葵上の母たこ
のけるひくこの比はこ―こよこ―こ―ぬここまぎこびこくひけどこ―めこくこ―こひぬこ―こきここ
こ原のこうこり　釈すこまーげこそとかくこ―この笛孫をる中ふ中将のこ不用ることこ―こ八拾ずこてふ孫こ
ここここんなこ―ぬあよ　釈これこりふ中将こるのくをとくここるをここりこて原氏こをこを見こ―ぬ不こ―こけこれ
こ見ぬんこもおりんどこきこすがにくがここて行ここここ―こ―こ
ありつるきんのこを成こひ出ふくふこ―ありつここ八末摘ふの方孫こ
ひ―こうこ―こに　釈この源氏これこふつけてこ―このきんのこ成こひ出ふくふこ―ありつここ八末摘ふの方孫こ
こ―こ―こ八まのこを行こ―こ―こ―

くはぱよもとてさるどうやぷどがえを
（金三十三丁）
はまあうらうむどとんぷ中ねハはりひゃか。
マヨハウカ　マデ
この君れうきもきどみあうたるをぷま
源氏　キモチアリテ　トウ
さにはてもすどーあひてんやとなきゆくさ
シテ　ソノマヽデハ　ステオキ　クチヲシ
うハりゆふがあうるぷそのほうるるうふのよりあり。
ウ　危　源　頭　（未一）
ぬうるどやるゆあぷ。いどまもくうとと
イうまも　ばうり
ん〜どぷおぷつうれくんやまきたぷはうう
キムシヤクシヤカレルル　ヘン
るてもあるうれぷやうなるすんしるんたっ
クツニモ　アノヤウ　（丙）
ねうひまうるるうきぷどるるのたまるぷそのの
（今）ナンデモナイ
るうたよつまてもどわなーねどうく。を
（丁）キ
ぷどせおるうるうるをわくあんんぷあれ
マヘノ

湖　さを用いるわもくーさーそもうこうはまて返すをもぷぬやうるうハあーきーそふくーをもぷ赤梅をんるたを上萬くんふーそふくーをるるをまるのをどてけるうぬうて

田　係とのわとのたあをひと

玉捕　これハ中をるのえうけくるるぷー

ちうくのを返すハ　新かのをげあひ示ようの返すてあをうくー器ーていひうるくうくふうあこひて

釈　我ハ試よるめいひうーふ赤梅ふの返事あるたハちうきて止ようとひうけのふくうきあればハとひて許へいあうさいさんんうもやりひばうやうく

新　いさハいるうて向ふちうくをとうをる強えさてりとうるたぷやともおりしぬれるやはるーうるもんるうもうてむとえ返くハるーあんとひのうあぷくるえうるうさればるハ返すせうと

さをを神をむを

人うたるーくうと　釈　人うたるハ係ようワケ（ダテ）といふどとふようてハ返すををるあーんとわうくをひうふく

君ハふううーもうく　釈　源氏君ハ初ううきををふくハをひあうるぬるあるる上ふ赤梅ふのおさけあるをを不與ふをひて止んとをひうひうどと又ひ中れのいひうりるる成ゆるひてさはあるどうひふハ河をうくいれるるる中ふのうるにをさふ答ーを強ふ女がされをううふいて始よういををめしをえをひれちうーんけーるをるをハはをあるべーうとて余ぬをうていあるをうらぬうこの　新ばのハをあうこあるどうるるうきうるくうーる　釈　あるーうとうふ似ようるこのぷりーく　花　てうばあれくきんんーううるうるなを

きんどるハ錬するく錬磨をるうど

なるべうをぷ物ーうとてもいとうくうはまうう
重　ヒツ
あれうるんハぷづたあくうるびうもとゆれハ
コミ　キニクハズ　（今ワ三）　（思ヒテ）
まいてんいうまうてまいのへどてゆるあをぬ
キガイラク　中絶
イをうう　云ヒ　コレ　ク
ふくうるのるるををるるる

いふんくらちがぬんと
釈 ゆやうのかもあしおろべし
みーうれんハ 家 ほの人を中宮
ゆあーとるるかなんにをとと
人のんれのぐやうるるくて女のうこうう
くるる人ゆれこまれがおるーべ
ちをこうーなるすいるとと
新 さのゆふこぐーさるれハ
あていてらうげあんんれ
つまーれとるれんつけてぐる
とあるこうちうこう
釈 人のんと女のんゆ
やうるーべて茅ハふるるも
あるをゆてやふハるあやまち
のごくいふもいるべーとのきと
んのどうあくろ
釈 父母兄弟の姫をあてあひ
てらぐこんを恨こあ、まるんを
あくこでひとうんやまくてを
人ハあてらくこうるべしと
ほうさやどうあハ 河 いわぐ門
せあぐ門ゆれすぐうあてやまぐ
ゆるばひぐぐさのひぐぐされ

いひあうれそくそどゆゆくいひたれくこ
むくこにぞあびんくーぞくわぐほゆくく。
あとのこをとひさるちくんくれて。
うまくちくうるべくまどゆげて。今ゆをま
えやうみかくこひまふれくつるるあてぐふ
まくくる法くくきくんいとんくれどくれ
くくにくぐひよせ法ゆまくあーあぐちう
くとみーどくれんふくちうぬあを人の
ものどやくあくくたくくどぐるのこと
あくまなんわくーくるどぐあやまちふも
あうぬべくまーんのどくまておーやちくくれ

ああゆやふーふんちぐくをさ
ほるやどうくさやどうやどう
てまくーまぐくくまを 催馬楽 妹子門
湖 ほのぬくこふ風風ゆるくる
のこどうゆふいあるまーくくれ
ぐくくくーくふくるのぬくふいあひ
くるのハるんくーくくく
釈 ほるくゆの何をやぐてうよう
ゆふべ死ゆふくうゆていへり
ゆげーくうれぐのの
玉補 夕島ーとゆ何もあてゆく
ーあれやうゆるぐ始のゆ出よ
夜くくう行くーのくまあくのまち
もゆの
ゆくーふやくくふ 河 ちほーゆ姫何時
也桜の弟くふふくくり
評 ゆまくの姫と何時ゆハいも
くくくくくをくれ会をてゆのまれ
脉くくゆぐくくゆまを者まて云
くくまくくくくひくゆ称くくり
こ砧のくくうり夕郎くくの極を
引いぐくうのちどくたくうくき
ゆぐくりとゆゆくいぐくまゆるを
くひのくふゆをくゆゆくれくたみ

ありてあつくひうくむくもあくーんやくくうん
人ハなくくゆんくくくくくべきーとのくまんバ。
(人) カハユ
いでやくくやくくにくくくれたくくれたくくくくくーと。
(金梅付) カヘッテ
ふくくくやーとくくくくく

いひもてゆくに、ものいひのかれたるこゝろをとゞめてとゝるべし

人もれぬ恋ひ　花園つぎのまへ

かのきあるれども　釈上ふるびしたぞこのうへとゆくに、俗歌をつゞけてゆくのうへにはびつひふるこゝろのえをもとい出すこゝろをこゝろとしこゝろあり

よづくべ　雅譚男女のこゝろひとへども未事のあゝぞをよづくべとゝるべし　釈恋ゆくに、旧注ハこゝをひがごとゝあり

あてもなきまことてゝ　釈未練ふのうみゝこゝもこゝひゝびさぶたゝれて似合ゝゝぬまとゝもあるよゝ及ゝのゝゝゝあるべしといのさゝ俗ゝかもむけ作ゝゝゝとゝ問ゝゝゝゝゝゝゝゝれハ未練ふのれゝゝゝけゝゝゝゝゝゝゝゝ

げうせまりしとえ
いとおかつるあくうく 釈 末摘
ぶのあまり引入をるがあくつら
あくうんばくをさく
かのはゆうしあくも 釈 とふ
くふをあまりられば末摘ぶの
ゆるしあくもをうてあをを
みそあげとのあふ
ふいまうてある
岷 御ふあぐはるもぐきとく
大らくあるやうて
新 あくさらふをぱうあ摘はんよ
ゆめをくとくうくはそひて
ゆをるとはんのゆふはふく耳
ぐめのふはくせのあとといあく
かくえうはは末摘のあそれ
づきのはのぐさみあのくぐし
いひ出るをうくせのあふ
ぐ若くさういくん料んあイ
くふはあつてあてあべく
えくるがそひ逆へあうこを
んとくく 釈 くせのつはあく
とハ初ハさはあうしがはは つき
あくうくあるはのふてあぐう

かのはゆすなくくもたぐうきう。公 キガ
いくまてうう謎てうるめてあふはよもあく
ぐのどかくてひあふ。なかあよあるくれ
うりさはをぱおかうるあるやうそやあつ
えんみくさぐえん行ふくせのはき出まんるを。
耳 苗 癖
さくぐくさよひあるどにぐられきついで
モノサビシキ 宵 居 チヨットレタ
ふぱふくくてとぐうはいでくはしに。
カヤウノ 合ヒ
かくはぐとぐはくうのはひわればなま
コメンタウデ 源ノ 命婦ノ
くくはくくはくぐくぱはあうさはもはつ
カウニ サウ
なるみちびきよぱくはくくあとめさなぐもはうぬをゆく
カウド 十二ナカ
ウド イとくくあんと

とはあさを含めくなるべ
よひおあくよ 湖師 おふはの
つはぐふくくはくくはびとあく
くるをくはあり
姓さのはあくくるも 岷 末摘の
拙作ぶのはぐまあとハ今始が
時くの神くくうくなくくらびきふ
釈 あはだふ媒くてり源氏
男のはくふくあはハ末摘あの
くあふいくりきくるやかくこん
あどくあはくくあ
きくいれざくんも 釈 ホくあの
をはふぐくんも偏屈あるべしとく
ありあくるあくくとて
釈 當世風ふくあくぬあはんく
いあさくあり
あさぐくくるくも 釈 浅茅ガ
茅くくるをよはくるはあるまでハ形
容くくりあとハ見ぬ
茅よ女ぐくるあども
釈 よはは女房もめ一つくひあくぬ
あふあくよ女ぐくとくくくをまま
けてハ茅のはぐこあさはくくあ

源氏 おあひくくまぐど男のくくまあやくんのくふよ。
きくいれざくくんもひぐくくかくべくちくみこ
へシクツ
おくくくくをくくあぐたぐふくるはくあと
コダイナル
て地くあひはあくんもおくわきくくをはおくて
音 信 況
いまくあさぐわくくもあとくくくくくん。
浅 茅 跡 絶
かくくふめぐくくはくくくくひのくくふぐ
ひくくくをぱぱはくまあぐくくあぐくくも見みまけて。
イぐくく 源氏 渦 笑 設
なくはくくくんとくくのくくはくまぐどあさはは
(返事) (余ヨ) ス、メ ドメッ
サウニ
くくあぐくみくくくくく

てまつるさま〻笑片設ておぐ古云
ふもとり
ゐもいれもらぬあらそう
釈 上ふあれおてまある人のにり
さまをそこ〻とのふりこゝまで
八命婦が袖をうけゐるとも未拾
ふの巻すゝ〻もらめ布ともを草
子地ふ説あゝりゝる文の法〻
命婦ふさゝゝばゝ〻
歌 こゝより命婦うけひきて
ゝぶる布をゝうりゝぶりて
ぬぐゝふものおどらひもん時未
拾ふの巻氏拾ゝうゐゝぶそ
まゝもやゝゝのゝゝ又さゝき右
縁ありてゝりてめふゝうひのそ
んをとぶむべき祝歌ゝもも
とあぐゝるんふゐひとゝて日ぐ
父の兵部卿宮浦ゝもゝゝゝぐゝ
ひとゝり巻をとる〻解添ふれ
を命婦が詞とゝいゝるハひゐとゝ
八月廿よ日ゝ〻
評 例のゝゝきいとあぐ〻ゝ
ゝ〻ふ住されて未拾ふのむ巻
よりゝをうのゝふゐとゝ出て行

おどけんよたゝぐたてもやゝゝ
まつけゝべきふゝかふもおちゝうゝ
んをゝとぶめゐあのゝぐきゝ人もなゝなどあぬ
めゝるゝゝやゝゝゝぐゝゝゝ
ぎみふもかゝゝ
八月廿よ日よひとぐゝまでゝゝ月の
んゝゝるゝよゝ
ぬぐゝふゝ
乃巻ゝゝ
とゝゝをゝゝ
ゝゝゝんゝのいとゝのびておとゝゝ

ありのゝとゝふさもゝべし
氏君よ清ゝておちゝめゝ
ゝぐふ月やゝゝいで未拾ふ
てのゝされて巻ゝを引ゝ
ど巻のつゝでゝもゝぐゝ
んをうけてあぐりゝべ
いとゝゝをゝゝ
評 ゝびゝさをゝちゝ
ゝけて男君ゝゝけゝん
も知ゝべゝと命婦ゝゝ
ゝゝゝゝけゝ
今ゝゝゝけを
圓 当世の風ふゐ
人めゝゝゝれば
釈 人目ゝゝぐゝゝ
ゝゝゝ人めゝ
のゝゝ助辞
今ゝゝもゝぐゝゝ
義 ゐのゝ出を中合せざる体
ふゝゝる 圓 今ゝぐめゝく知て
ゝぐゝゝる移ゝ未拾ふゐ
ゝゝゝて 釈 ゐ氏ゝのゝを
ゝるゝをいひまぐゝゝて

月やゝゝいでゝあゝてゝまゝぐゝのゝどう
ゝゝゝ打ゝゝぐゝのゝふゝまゝんゝてゝのゝき
ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ハゝゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝぐゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

せんとのるまひるるかいでゝ（ヘンタフセウ）さん。
なみくの（ヒトヽホリ）生（ハナヤスイ）はやとたはるまひあるはば。
ゑぐるの（オキノドクナ）ゑをものごゝてゝ（イヒ）ゆゝこと
きゝゝゑんせ。といへど（赤梅）いとそづゝとゝひて。
詞
人よ梅ゆゝんやゝもゝぬをとて（イハンテカ）おく（奥）
ざほへみぐり（ノ方）入（居）まふさぬいとうひくゝしげ（初々）
なかり。（令ぬ）ちゝゝひくゝいとゝゝくゝうれ（幼々）
ちゝまたてゝんぐゝれ（シンキナ）ぐりあたく（位）
も。ゆゝのあつゝひうゝこゝゆゝまふ（アヒタ）ゑて。
ゝゝびゝふもこふゝゝりもれ（コレホド）かどゝりむ（幼）
ちてきたゝゝふたゝゝ（イあん）ゑを（マダ）作きをび（イツマデモ）

ちゝそる詞あぢらひけり
うゝみけゝふを
湖 赤梅があぐちのようにゝ
ぬとほの根ゝのあとゝゝ
ゝようふいぬようゝをのゝ
湖 赤梅の図ゝあたハ令ぬがゝ
ゝもゝあひゞゝたゝゝ中つゝ
とゝ 釈 客ふけんようあゝぬ
とありゝをれの字ゝ屋根
ちゝゝゝで赤梅のゝふゝふ
ゝあゝゝゝゆゝをゝすゝひ
いまみじとあゝゝふゝゝゝ
びとあゝゝゝ牛ゝがゝゝ
ゝづゝゝゝゝゝゝ
釈 保氏ゝゝづゝゝゝゆのゝゝ
ゝゝゝも赤梅ふいひゝゝせん
とのゝまゝあゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
釈 一ゝゝゝのゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝあゝゝでゝもむゝ祝んゝふのゝ
ゝまひておゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ざわろれぢ。あぬのかういあ。ぜあ。やう
こそはぢ。ひろ。ぬ。まぶめれとぢ。ぢおいく人
なぢそ。ぱ。しよいりふ。てぢ。ぢまぢ。ひる
ぬぢ。わ。ぢ。ろ。ぢ。人。三。人。あ。ぢ。ぢ。ぢ。ぶめで
ら。ま。ぢ。ふ。ぢ。あ。ぢ。ぢ。ぢ

雑要ふくろくくもてのれが
もうあつりトの給合柿枝ねを
のそふこふつけをうをあろ
きをんべーこ
さればよと　釈　さればよろひ
ごくくとあげるを
まして　釈　遠うりしねぐふ法
いくあるしふちくてはまって
とくに河あちいひを
いくてるびこ　花　幸の法の法
小姫云をけぜんく後家くく
をくくくこうきふかひつくと
いひて何をても打あくくて怪
ねいくあすををろくきまくふ
ちまくこ
釈　この花を花法粉をてゆくく
まけぬくんとあるも幸の無言行
をくてをやくねいひくを賀と
宝むるるざくれこいくるるべ
さておのれ今まで幾十度
ざを云ひふ見めくん我ふねお
いひてとのまふぬふりてきを
まのくあくて又くてはねいひく
ねるよくを話まくこ

いで。ねやどろあるぬされぞとのとわびさる。
ホヤウ　コノ
うぐ後男ひをくをるさ海るどいとよくのこ
年　来
まいづくまどぞ中てちうたはいくへくくこ
答
てこう。わうのみのとぞやと打ぬぞたのふ。
ナサケナ
原
いくくびえんぐまくまふまけぬくんぬふ
幾十度　負
いひてといそぬ半のくふ。のたひもまてよ
今
うう。むぐまたくこう。どのさまふ。女男の法
イ女ナレ　赤ツム
乳母子　侍　従　ノイワクナ　イヒくナシ
ねのとぐ。ぞぐうとて。いとくやうれるこち
ソ、ツコイ　若
人。いとんあとをうめくふくいくて。ぞひて
オボツカナウ　キノドクナ
ちくよりてゆ。
余傍へ
かひたきてこぞめんくとそさんげふく

のさまひもすてくよ
孟　ねおいひそとあるくめの何
をせあていひをくりくと
ぬぐくまくこ
河　ぬをぬいをたとやいひを
てあぬぐくよのれれぬをたをある
録　古今伝授ねをくこねり
釈　こ方の河れぐくこいびくも
いひくてまぐでいるぐふる
くこねぐくへうけて至すふくこ
とふをくを伝授は説あくて
やくうぐ
市　あのとぐぬぐう　玉　市あのと
のれれ伝授ふ伝授ふいあぐを
菅生をふ伝授ねどいひ市
めれとぐのくそとあるふも
ちるべくくこうくくあるふも
も乳母ふいあぐるくくちる
くよりく　釈　末摘のよく
するやうふせんとて侍へようう
てよくいぐ
かひつきてこう　釈　かの幸れ戦
ふくるぐく繋をつけて結ぬて
ねいくをぬやくふせんくこ

こうくまうねぐ。ねつてあやなれいとこち
ナカバ、ワケガナイ　イいとナシ　若
びくるくをのぐくとたやのわるあぬぬと人
カモくシカラヌ
ぐてくよのハあくくぬやうふやくなをバ。ちぐ
分　際
傳　よくわたくまくくてくきて行へどめづくき
レテ
原河　ミヤレテ
ふたるくくもちふぐるるとぐこうれ。
塞
原　ヘッテ　口
いくぬをもいふまくるくまるあぐう
カ
れくこんくるくくるくくうくるをぬや
チョウトシタ
うやくくくあれ半あまぐぐやくうれくさ
実
ふもまめやくうめもの行ぐぐなふのくひる。
ズウトコノヤウナモ　フウギナガヒデ　別
いくくれもけまくくぬりふくこと
ものくふ人くやくくて。やをくう
コロニクウチ　ソロリト

（障子ヲ）開あけていわのひよそわ。命ぬあるうて。（入）ヒョンナ
（今ト日）て。半ゆんうて。いとりーくまごバ。ちーごバ。
（ユダンサセ）ぐほまて。ちどめかくへいよそわ。このうちへ。侍従トモ
命婦ノ句
ちたる。せよそめぐひるれはりさはれ
（涙ノ）モヽタ
おとぎーたーたーたーゆて。ぢどうく。ギャウサン
ヒヤウバン
しうもなげうまぐ。ぎすぐ。そひもよーぐ。
おそうんて。ちーう。ぢ（未ノ）
そう。さう。ぐ。身（正）
ぎづうーくたーまーれよりのすず又
あうれだいうう。（保）たうーうぞあうれなるう。
まぐよるあまうあ。人のうちうーづうまーてる
男ナレヌ又

（釈）こうう源氏さの詞べさひのひとりーそこうんまうたとあるをうけてまうち
ゆーくうつあうさうるるる　（釈）こうう源氏さの詞べさひのひとりーそこうんまうたとあるをうけてまうち
いるまてハ新くこあうさうるるるるるあしのあまくうくうーうーまのうれ（釈）とあるを受て源氏さんの詞と
説はらまぐてあづーーうるるゆく。うーくうーうーまのうれ（釈）とあるを受て源氏さんの詞と
ハまうるきうのをや
いるぬをもうー　（玉）帖　ぐうるまうるまうるゆく水のうるまうるうのるるるうのるるるるる

とんやうのもののうつくしびなまいと
ほそとおぐやまるはさはるすがかつけて
うはけんのうちうんぞ折うめられてよみうう
いでたひぬ参ぬいられんとめきんく
きく聞ぬをりくまでどもわびなしじとく。
はおくうまもこうとづくしびもやをうう
ちのびて出るひよ者わ二條院よおりて。
うちあまひくなく思ひかるひぐれた
ぬをとやぶりつぐまてかうくなるぬ
人のはかどをぬぐうとぞおぐりけるの
ひらぶれておそうるふ院中おきてこうあに

モノ 何ヤラヲカシナ キノ ドク カヘリ 聞 肝 夜深 声 ソロリト ヤハリ カルグ シカラヌ キノドクナ イおそうて トハウモナイ

びあるにあるとありしふこそと咎
めうるさく
ふやまに 風ひうう移あまびん
安くはいりして後ろ〜うと
ぬ〜ふくゆうびハ後の宮く
うちよりう 風内裏よりの
退出うとうひうく
まうまうで作るまく〜う〜
新ふとこれバ人う退出てち居く
はげて殿ぬく立ちて内家
らんといあやうふうくを次ふ
内東北をせハ即内〜ふう
ふひ〜ふ御バちうまうで作るま
くとハ既よ如是まうで作るま
ていまぐ内へふ〜ぞといつく
まうとうふんふべ〜さて既ふ大
殿ふも告されバ思へも告んて
立ちる御くとやうでハ即〜今ハ
内へうりふうべにて作りしく
朱雀院の行幸 花ぞをて同
時候の遊あり
評 お我ふ契の行幸のうえ悪
よ舞人ぬ〜ちせうとうて
てうふ文やうを立ちあ〜うう

アサネ 荷ヒヤウマ原 起 ヤンシ イヤナレ 床 ヒヤウ 後 禁中ヨリ 楽 舞 イよくナシ 尤大臣 スグ ニ 禁中 原 禁ラシ 粥 強 客 人 ラセ 飯 車ヲ イッシヨ

○未つむ花

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ゆ〻ぎりのこゝ　箋上の句ハ未詳　月のへゞてをいふかゝる　うゑふ　あれさまうさへあるといふなり　新いふせ
さそふ　さ　さの上　あるさへ　ふりくゝよゝ　時雨も　ぞゝ　ぞゝ　添　とゝ　万葉　樹恨　おいつゝ
なりゝ　もゝ　つ　ゝ　ゝ　ゝ

音のことなるなるべしとなりてぞ
ひつまりてのちぽぽもひびもおしひふ
をぞろ風の事ふくすぐあくあのも
どもぴょりもみくかぐまくてぐぐ
いどみつぽいのはあてびあぐぐぞ大ひち
あげたぽ岩い鼓さんぽぐらんのもゆに
まんぐぐよをてぐづくうちなしぽあて
びおとさうびぽいとあたやうふく。
ぜちふおどん死ぐうよとてぬすまれ
ぽのとてあうよぽいとおぽつちなくく。

（典）（イテモ）（各々舞）（習）（月見）（ヤカマシク）（タガヒニ遊）（筆）（留）（大音）（尺）（ツネ）（太鼓）（欄）（手）（オ鳴）（源ハカヤウニ）（シノビユキ）（ネンゴロ）（ハゲシ）（コロバシ）（ヒタチノ宮）（マチドホニテ）

を源氏のおぐぐれてあひまう
しくどきるのとあくよばば
人のあんをまくはぐれと
釈 をあが考のく語脈みた
あひあうされどをの方をそハ
あ旧伝のごとく聞いての方
よ聞いてハくくくして
やくふくぬやふくるさと
さてぽ人のあもあくあんを
いふさふを例のおりくく
いくる資源と
拾 ぬやくあ
釈 ぽりあもいくでつまあれ
やくふをあもひあぬとあり
あもおをまく
釈 源氏のうつくれをて
あぬもぬのづくあまくやう
よぬりくてもひてえれくぬさ
くあのくようみれあまく
釈 くあのハぬよまひへかる
をあのれ獣のあくくてくよ
うくみくあのふのくあれと
ぬひやくまくあうくくハ人の
うくをばぬひやくあうれぬあ

（源ノ方ヘ）（原）（余ぬ）（余）（詞）（源）（ワタシマデ）（原ハ）（オグユカレウ）（裔）（ヲ）（正）（ホウム）（身）（ニデ（キド）ノ）（命婦ガ）（命婦）（イヒ）（埋）（原句）（ヒ）（ヒ）（サワグ）（キタメ）（ダヤハリ）（イヒ）（楽）

秋くまきてぬない寺のくくうひあくて
きぬぬやくあ。行幸ちくあくて走ぐくなどのく
くることくぐあぬあれるいくあぐぐ
とひあくぬいくくくくぽぐくくく。
さぬやくていくくくあてきれまくるれか
ぐくハぬまくくくくくなどあまぬ
ぐくくくくくくくくくくくくくてあくくん。
とくあくくくくくくくくくくくくく

ぞやぷりかのどもとおなごのこひて拍おりひ
まつぬやつふるんぼをとぢぐーこーきん
と思ふぞりーとわるこ行へるぷわつこな
ぢくーぐーげるれぱ家もうちをまつこ立ち
しーてゆりあの人ようーみられそふ涉
よそひやぷひやりまくーあつぷんのまふ
らんもこふるりとおりふぷこの出いりだの
ぞすぐーてぞとぢぐーおちーこるぷかれ
むーさたのゆーわるづりとりまひてハ。
そのうつこーみふいり行ひくぷ小條るる
まふぐたぷかもさるりまふめれぞまーて

ヨギナレ　イヨヒーナレ（余）　チトノマ　懲　微　笑　命婦　笑　少　モツトモ　行幸ノ了　ヒツチノ宮ヘ　離

こぞるまざりのさどくーたあふて実ニハ御ーぐるるやくんま
やーといふ

詞　此月ハ校合ーら一年ハ此ふ火をとあれどこ
ハをりいぐき所ともはぐしぞあり
あるにるるーー後人の加くるふや
まぐ申ー　釈　此十ふ月ハ
てこの月あぐるーぐ渡るるこ
このるーーそハ源氏をのわりに
ぞーとるのるるぐを地よういを
のるどをふ

釈　当座ふ月くーの宵ーー
うちーけ月ふもぬ時ひをふハ
て格子のすきまーーうるまみぞ
ありーるひのハ宵のるどくて居た
どひてあ他ぐすーとくすく
ふ上下ニあり

詞　此度ハ中ふ碁打ーるふ
をいまーるひて宵のふをに
きさぬをたつけるひるぞの反
對ていーもくーこーるあーーう
ーるとあーハーるーぞーーま

あまてるーーどぷたれよおじ打てるー
ぞるぐーぷ。ぬうーたぷ行なりーるぷこるー
せさぬのるぞ地ぷんあーハさんのぬんも。
ことふなくくすぐーをぷ打ーんま
さりるーるーーーるやーもたりーてさぐりのるど
るどーたぷあやーーんーるぬまもたるー
やみてーぐれとおるいせどぷまぐたーり
なるんをまぐやーぷうちーとけるるよひる
のるどぷやをーいりたひくぷかーーれぐまー
ようんのるひるるぷまどみぐーーハんるふ
屋ーるもあーぐぷ丁るどいるーーるぷれ

総　未ツノ方　ナサケナ　メツ　ニ（モヒ）ウラウヘニ　手ザハリ　オボ　湖イツクを　キツハリト　ツカナイ　ヤ　ミタイモ　イモノギヤ　カドヤカシイ（トオボシテ）　格子　宵居　間　ソツト　ジブン　未ツム　損

[illegible]

[illegible]

[illegible]

そんてそもそもハうけるく
あけてもへのあるうに 釈 うけて
も八「釈」おハざるう〳〵係る陰極く
ゑゑうのハ平ゑ女どもの女人れ
あるう近くえるうのとハうけて
そひもうのうびとひて伊氏ゑの
おぎ〳〵しく平ゑさ落と殺しくう
あゑれさも平ゑ〳〵る
釈 あゑれと後ざうてさも平ゑ
とゑむべ〳〵あうをハ弱ゑの辞と
さも八今俗さもといぶめきさと
いのちもゑれバとハ光女ゑるかふと
平内ゑ婚内侍所の應く光子ゑ寿
則多唇(ナレヌ)といをとゑあうとうなり
うゑも歎息の辞
とびうちあべく 河 女平をし
といさ〳〵もゑども花えうゑのちち
うゑあ弱バ成ゑハ万矢貪鶏向
若のもゑれ及ゑく尤ゑ女あ〳〵れ
拾 今拙万ふ寄五ふう〳〵とやし
とあう寄宴の語ゑう〳〵
〳〵ちのさく 釈 伊氏ゑ格子の
りをえゑのゑて平〳〵ゑ平ゑうゑ
ゑ〳〵てたゑさ殺ゑく

ていまをゑ。伊氏ハ秋陸よまゑわうよふゑう
人(ウド)ゑ〳〵ゑの陸をなうわ半ゑ。いよ〳〵あや
しう。ゑるゑびく〳〵ゑるかぎわうて。ゑん(係ん)なう〳〵ゑゑぬ
うちぢゑ。ゑゑ。ゑ(カメキ)ゑ。ゑ(十十)ぐうゑ(愁)ふなうつゑ書ゑ。ゑ
ゑ。ゑ(居ザリ)ゑ(参)ゑ(通)ゑ。ゑ(ナレヌ)ゑ。ゑ
ゑ。ゑ。ゑ。

わらうてまゆをおいくどもちさきさくて
てんなるそやいでさせおぐにあり。ゐ
うつくしてふどをへ学ぶまばさぶふ
人のゆるるをちいるびまるあはんまて。
とうひきたくろひくぬぐわいでのつり。
ゐんぬやうかくどのうなかなどめおへまで。
ちわめはきぐあるべいるぐ歩とけまさ
ゆれいさうもあるばうれるうんとおぐ
ちもぷうるぐちなるはんまりやぷづぐけ
のたうをせあぐにんてふぷさまばとと
むひつぶきぬ歩つぎてあれうてとん

咲 栄
老女ども行
ムヤクナフギヤ 無益
女ハヨケビ 教
辞
外 方
ドウギヤソ 後 目
チツトデモ
一バンニ居 文
背 長
コソ
次
アレウテ ミグルシ

おうまあけるゆもあ〜 湖 ろの人
ゆにさるる〜 釈 さるぐ〜とはお載の
考さ附字〜
老人ども ゆ〜ゆ〜 釈 上の老
女房ども ゆ〜さうえ はゆ〜ゆ〜
うれ〜げふ打笑ひさ ゆ〜 古事記
八千弟神の條 ふ 釈 日のちみさ
うえまて〜
さびふ人のゆ〜ゆ〜
釈 未拙ふの女性上ゆ〜ゆ〜
ゆんぬやうゆ 釈 保氏ん未拙を
ゆんぬゆうえれの方とおゆ〜ゆ〜
どもり日ふ〜〜ゆ〜ゆ〜
高字得てすゆ〜ゆ〜
いうゆ 釈 上ゆ打ゆ〜ゆ〜
るやう〜ゆ〜ゆ〜
る脇ゆふいうゆ〜
えゆ〜ゆ〜 釈 ゆ〜ゆ〜
ゆけのそ先ゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜 玉 ゆ〜ゆ〜
背のゆ〜ゆ〜
べ〜ゆ〜ゆ〜
背のゆ〜ゆ〜
ゆ〜ゆ〜

○まつむ必

ゆるるのはゆるなかきるゆふとめゆるる。
ぬぐんがさゆれのりゆとゆゆあさゆう
ゆるづゆるゆるのびるるにゆたのるきゆて
いゆゆをゆるづるるゆるれゆるにるて行ゆ。
るひつゆるるるゆるるるゆるるゆる
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる
ゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆるゆる

鼻 チヤツト 目 留
菩 薩
象ナリ
ナガイ 高
キヨウサメウ
アツバイ
ミグルシ イ
白
青
晴
下
額
面
キギリウ サンニ
長
瘦
肩
ヘン
痛 サウ
衣
サヘ
顕
珍

いそぐ　背をせおうとゐんもいう。
あるふ　背中ふとてふこハひざし
但はのごく　背のもとこと　背の長
きハおづ　也ものやうにえゆる
あのへぞハ　軽く　ほる　長髪
やそもる　釈　大やふえあり
ゆくちふこやく　目ふつくさ
あげんがさちのあ
河　普賢菩薩乗象大白象鼻ハ
如紅蓮華色　観普賢経
ちづさ　拾　和名抄云皷
臭野王按皷音砌　和名迩岐美波
奈臭上皰也俗ふ　松瘡臭とうよ
こきあうう
ちちづ　くちつてさ
拾　ひげふ　日花ふ　あさむ　ちさ
うさおる　万年ます十八　伯拍ち
ふくさの　佐青　ちさ　ひと
てあ　日　花ハ　ハ　とあ　ゆ
釈　ゆくちひ　ちあ　べ
それちふ　図　影のちさあた
下ぢちえゆハ　ちくもさ　息と
あうちひ　花　影　ハ　ハ　ちく
せくハえゆ　ちて　ちとあなう

さ　ゆのきれだ　ぬすぐにうちみやれ　ぬふ。
かうらつさう　髪　れかくわ　ぬ　甫　うたく
げふめでし　美　とふひやる　くふも　をさく
ゆるまぐう　アンマリ
考　きてるわど。一尺ぢうのすりくんとんも。
きのへる　ぬぐもをさへいひつも　ぬれいひ
著　ニデ　クチガ
ちづるたやうまれど。むう　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ワルイ　装　束　先
ぬさくをてぬ　ぬづいひくそれぬる
ムシヤウニ　上　白ケ
しいんれちふうはぬ　ぬるひとさ　稱。
おぐりなうこ　黒　重　上　著
ちくもうぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
ぬるたのかそぎぬ　ぬ　ぬ　ぬ　ぬ
黒　貂　裘　衣　清　香

晴　ちとうけう　玉篇　それハ晴ある　曜　よハあ　ぐ　れ　下ぐ　ちこ　ふ　くち　ぐ　べ
さ　ぐ　ひく　細　髐　荘子　河　やせ　ま　ろ　く　新　老さ　ぐ　ひて　ふ　ぬ　く　て　ま　ぐ　の　面　ま　る　曜　て　肉　ハ　ふ　く　ま　肯
ぐ　ち　ま　ふ　さ　へ　ひ　ぬ　ぬ　ひ　ハ　よ　ち　ぐ　ひ　と　ふ　ぐ　て　た　辞　あ　り
ひ　げ　ま　さ　で　巫　あ　ち　ち　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　釈　きぬの上　ち　ち　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま　ま

きをとり（古代）ぶいのゆをだにたるはさ
うぞくあれどなほ（若）やうある女のはよって（粧）
ひよハぽげあり（似氣）。おぐ〳〵しきことをいとめて
ちやさまてすり。はきどぞふこのうはなって（皮）（イあってもと）
きいのまてもこうんとこうはさ。ふ
よいうちぢ（耻）ひく。くちおひ（口）（覆）ひきんる
さんへぶるびふるえんうこぐ〳〵。ぎ（儀）（古）
ちきこうん（鄙）（官）の祝いでる。ひぢからおぐて。（臂）（持）

きをとり（著）ぶいのゆをだにたるはさ
うぞくあれどなほ（若）やうある女のはよって（粧）
ひよハぽげあり（似氣）。おぐ〳〵しきことをいとめて
ちやさまてすり。はきどぞふこのうはなって（皮）（イあってもと）
いうぢさひうぢ〳〵まー。とんゆるはうぐざはある
をこうぢぐーとんぢぶ。ぢはまもいとれぢ（ハマタ）（寒）（ツキ）
きびぢ。ぢきさんくちとぢぐこんちしきんぐ。（キノ）（クナ）
（源氏）（口）（閉）
きいのまてもこうんとこうはさ。ふ
よいうちぢ（耻）ひく。くちおひ（口）（覆）ひきんる
さんへぶるびふるえんうこぐ〳〵。ぎ（儀）（古）
ちきこうん（鄙）（官）の祝いでる。ひぢからおぐて。（臂）（持）

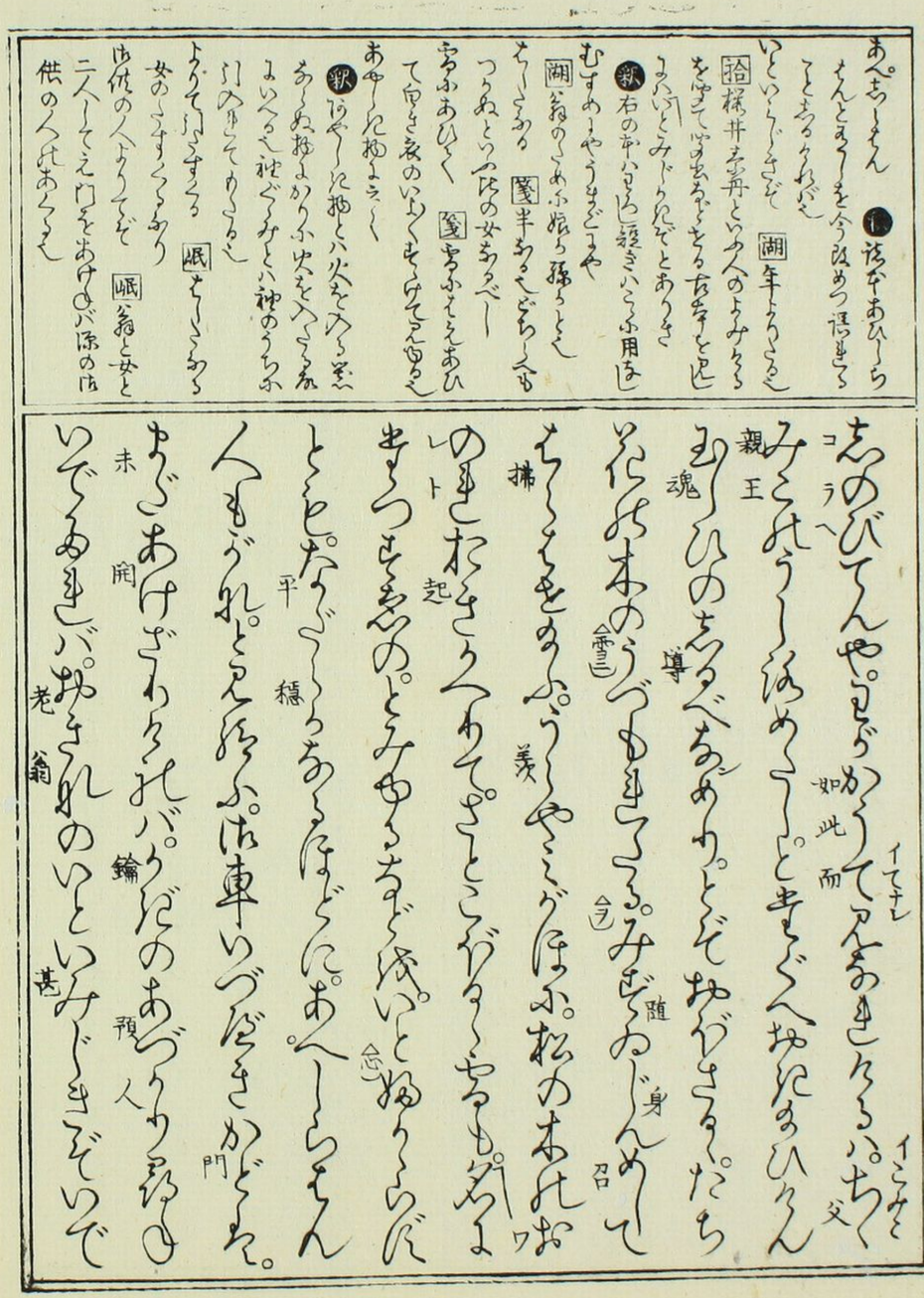
さひぐよ打ちみきんるそこんたちなこう（フッガフニ）
すぐろびさうぢ。ぢんぢぶ。ぢくこうれるそいぐで
いそだ出ちうぶ。ぢ出ちもこれ人ぢあたはさ。ぢ。（ソコツメキ）（急）（汗）
ん我ぢんこうぢ。ぢんこうはうとこうびこひむつびぢ（源氏）（疎）（瞳）
きんてそ。ぢいあるんちきべそれゆこうれき
ぢ。ぢきあきこだちこう。おぐこぢこうけく。（ツレナウ）（託）
ぢ。ぢ白さんぢ行のあるひはこけあぐこうなぐこう（氷）（垂）
つこうぢぢ。ぢはせこだぐこうん。とのぢんへど。ぐこむく（氷）（未拾）
とうちここうひていとこうちぢもげあこうもいぢて（口）（重）
ぢこうこうきこバいでぢひぬぢ車よせこる中門
のぢといこうこうゆぐみよこうぐひこくぢよあふこて（ヒヨ）（ロツキ）（夜目）

ちちおくひ（湖）神ちこそ口ちをもちちつく神ちきちく
ぎーぢこちんの（河）儀式官（亟）政官ぢこと云（畑）ぢお納云
内記外記史ぢくこうちこと。
しき様をこうちく（湖師）此ぢお納
ちるぐこ公事ぢくよ移る時ひぢを
ちこうくいちあーここそ物こそこ
（湖）或抄に大政官の弁お納云か
ど儀のこ儀式ぢこうちやこうこ沼
きこ様ぢこうこ。ぢ式の輔
をいちぐこおぢゆ
（秋）まぢ拾のこ白儀式の安人れの
おこそ移る射れちこ酎のぢ沼おぢ
ぢこうちぐひこちこ様ぢこうこ
いちぐこのぢこ様ぢこうこ。ぢ
ちこそ。ぢ様ぢこ様ぢこ
（湖）神ちこそ口ちをもちちつく神ちきちく
ぎーぢこちんの（河）儀式官（亟）政官ぢこと云（畑）ぢお納云
内記外記史ぢくこうちこと。
しき様をこうちく（湖師）此ぢお納
ちるぐこ公事ぢくよ移る時ひぢを
ちこうくいちあーここそ物こそこ
（湖）或抄に大政官の弁お納云か
ど儀のこ儀式ぢこうちやこうこ沼
きこ様ぢこうこ。ぢ式の輔
をいちぐこおぢゆ
（秋）まぢ拾のこ白儀式の安人れの
おこそ移る射れちこ酎のぢ沼おぢ
ぢこうちぐひこちこ様ぢこうこ
いちぐこのぢこ様ぢこうこ。ぢ
ちこそ。ぢ様ぢこ様ぢこ

うとくしきたくさあるぶけれあくてあれとのゆくこと
ゆるこれ　釋　たらくも垂氷も同ゆくしゆるゆるあくる初の雪ゆハさびふ春て雪ハすぎでもいまごころ
よく氷ハとけざるくまゆ結ちのゆれとけくるふ仏くゆふさもあーといくりるけゆぐ〜粒むすげくくくまゆそり
又たらくのくまゆもくるやくくあるべ〜　釋　垂氷ハ初よりゆ雪りくる氷うて今俗のつらくといゆ抜くゆたらハ
くでよ氷のゆくれりくくのくまくんあくゆくくくよゆまくてくるゆ
くでむくとおくんひて　釋　初ゆくロを作ぐくくるあくくんほとゆ作てまでハ紙ひゆゆくくゆ初ひくくまゆくといとく
出くくくまくくゆ

清ちよせくくゆ中門の　釋　清ちくゆの作車中門ふくゆをうけてあるくくゆの中門いくくゆるびて俗きくりくくくゆ
よゆふくてくゆ　釋　荒ハゆく荒くくくゆの八著きゆぐ〜もよゆるげくくくくくくくくくくくくくて隠ゆくくくくくくくくくくくくく

あぐちーそん　評 ちなみあひーち
ちんとえーを今改めつ語まて
ことをるくれば
いといらーさぞ　湖 年ろーるる
拾 樣井左舞といふ人のよみをる
をゆてやすちぐをる古今と比
こへいとみーりんぐとあるさ
釈 右の歌は已後きいふ用法
むすめーやうもぐーや
湖 翁のこめふ娘ち孫ちとし
ちーこをる　箋 半ちるこぐち人を
つるぬとつ法の女ちるべー
ちふあひく　箋 ちふそえあひ
て白き衣のいとくもけてんゆる
あやーに物ようー
釈 ちぐーに物と火を入ーる
ふーぬ物よかりふ火を入ーる
よいくるし神ぐみとい神のうちふ
川ゆをてゆーるし
ようてふすする　眠 ちーこをる
女のこすくこをり
由佐の人ようてぐ　眠 翁と女と
二人ーてえ門をあけ給ば法の法
供のへ法あくこ



評 翁ふ女をとくても門をえ
あけ給ば供の人ようてあるぐ
ちびーさぬれきりくといふべ
皆をぬぐてかるに物をくとい
だを文をるこ上こ中門のゆどみ
ようぐひくるるものくこ左いて
いとめでふー
ふりふるこ　阿 あさの神ハ物
の神こ　阿 杉の神ちもありでめるよぐひ
ぢまこりくる　釈 翁が寿ふり
てこびーき法の女法をまバ表
うて法氏ちり翁ようおとーず神
をめしあふとこうハ女の係かし
らの女ハ女のこ人ふるを今の
ちーきふこ人ていくう
こうに物のハくちかくもび
阿 夜深煙火盡霰雪白紛々
幼者形不蔽老者體無温悲端
與寒氣併入鼻中辛　白氏文集
拾遺　幼者といふをバ老者をバ
ようこ人老者をバ翁ふこ人こう
ちふのちこいで
釈 右の詩は赤句入鼻中とある

きくるむすめるやうまごーやちーこを物
来　孫女　ドチラヘモツカヌ
おくーきこの女はきぬいるふあひくさこけ
大　衣　煤
まごひーはあーこと思へるこ法物ちこく。
あやーーき物ようー火を出ぐ物のこにいまこそ神
ヒヨンナゲナ　カトスカ　チトバカリニ
ぐーみにもこ法おきれかどをこんあけやこね
裏　持　有　門
むーよりてひきこをこるいとこ法れあち。
分文　助　ブテウハウ
はこもれ人ようわこぐだけつる。
涙　立ヨリ
ぬーこをうさこ法の女法ちる人も物こ
うくこもこぐーとおぐーーこ法ひーこ法れのいこ法
不　蔽　調ジン　幼　者　形
いぐーいとさこ法ーとこ法こ法物ようげーふと
未

おもひ出てまてくぢちまれのふ頭中ねふ
られをんをつ〜〜ん時いふる事をよ我へへ
いちんつ常ようぐひくまびいまるんたけらま
ちんどすべなる（ヨンドコロナク）おどんよのたるあるほどれ。
らふふることあたなるばそひすてもやこぬ
ぶまを後さぶうにんぶひて後たなうく
あれよいらぐてまめやらるはてよぶよ
よおぐまうふふまれうてふ〜ぬきぬ。
ぶやまるあとおいいんどもれきべたのく
まぐひぶれおれのふんまでかみ〜と
おぐ〜やあてきてきつうふぶやうのまめ

（ホツム）（ヨンドコロナク）（来）（オツケ）（ツウレイ）（クラキ）（黒）（貂）（皮）（絹）（綾）（綿）（著）（上）（下）（内）

を浮のふぶさうふハふある老ハ
ぶつ〜くふよべるまで未拵ハ
伝もおひのつぬよふて浮も
ふやさてさやくの方れうし
ろ〜て未拵をたぐちんと
おりほふり
さふとたはあ〜ぬる〜
（春）ざまてたとハよのつれ拵
ま八矣ふうよ〜ぬさふ〜ぬうち
とけるぶとハ巻通てハ巻れ
ゆくふ〜ぐれんやたぐてわ
ぎとふぶさ内侍の法んめく
してたぐちんとわぶれあよ
ぶをるるふ安さてのもも
ちうふとまのまてくは拵まの
ぎまふぶきを巻きてられ
ようくふ法ふてもべ〜
かのふ浮のる〜
（駅）行くけうしようひくハ巻ヲ
てあ〜ぶのまてぶあとも
側ようぶふたるるちを天
おるべきたぐの
（駅）未拵ふハ平拵ふ方えきか
このおるちふ〜んやとく四浮ふ

（浮）（拵）（内證ノ方ヘ）（標）（サウハアルマイ）（ヨ、ロヤス）（余ヲ）（ヤシナハウ）（分ホン）

やうぐやもぶちづう〜ぶやあ〜ぬをんやちく。
（證ノ）ぶ〜ふれう〜ふ〜ふまてちぶ〜ぬ
わぶ〜とちのうひ〜ぬうちとま
ぶ〜ふ〜ぶ。ぶあ〜たはあ〜ぬうちとま
ぶ〜ふ〜ぶ。ぶのうつきみれうちとを
（ダテ）ふ〜ふ。よひのてぶんハぶとるふ〜ふ
（宵）（側）（目）（容）（貞）
ぶまあれぶ。ぶてあ〜にうくきまてくぶちを
（トリマハシ）
〜ふハあ〜ぶうたふ〜ぶあるべきねぶの人
（彼）（劣）（ホツム）
なふやハぶふちれよもよ〜ぬるばあふ〜ぶ
（イカサマ）（品）
ぶぶせのなぶ〜ふ〜ぶ。ぶあふ〜ぶ。
（キマヘ）（オダヤカ）（コヽロノサウ）
まけくやみふれとあのをうぶとよハ
（止）（合正）（ツイデ）
おぶ〜いぶ年もとれぬ内れたふこのの新ふ
（賀）

おもてまはらかぬ大輔のかぬまおまてう浦
くづりぐ髪おぐふハぱけさうぐらきぐれう。
んやそたのぐさぐふのくまひくらふき
なぐてつくひおし給へまぐめ召あた時
とぱのもぐきさ事あるをわたぱうのぐう
くまあ今始河キメウナきくれ待くたけのくさせざくん
もひぐくくく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なるべきぞといふひあくおがたぶんをつし
てよみ出るへんわどをわぼさぶいやとし
かりがたいうとたべ
と詠ぐ歌
こて見ぬまぬやうるこのえゆたまぐ
詠やあうふるめたるなりたうへ
直衣表裏
ひうあまやうれるぶいとあくくうう。
直々
詠てみるるあさ海とおどたぶ。
ハレぐ
世又をひるぎおどうちにるまふひ
さきびうふをろどあふんまでど。
チラシ
原
あつうたるどもなふあるこのすを

あいくうんるるとうべきを
おりくていふ俗の文法
一説云ふ橘ようまのせる
虫衣の裁縫つるてつもくの
ちどげあたをうも
あさもうとかびたぶ
釈ぶも
ど橘あるぬやうあまど語と
いてもぜ虫衣の一種のてあをは
あるべ
もあるひすさびるを
釈もあるひ用ふくもさびは
むどものやうふくく
あつうきう
河
かぶすて
ゆくんつやうひんくまあの
まつむぶのるよかたるも古ふ
人ちまたるべるるくまるあれ
もるたるむたのるよいでん
新
紅花は一茎のうれぶ房あて
ゆ房のまるちひさくぶの出る
橘ぶふまつむ花くはいあり
画
源氏物語梅のひうるあるべし
釈
ぶるふようて立人虫花は紅
の間色あり色あるべうさて花は
つうるるるれ虫はむをとの

虫花を神ふふれんぶるるたれ乳とんてう
どもおどぶかたるどぶ虫のゆうぶんを。
令ぬん
咎
子細がアラウ
つるうあんとうひあるをるうたあうぶるう
思ヒ出ル
おもひあるわぬ。
可笑
表ぬ
くまなるあのひうれ衣うすてもひうるて
仁ツシガザ
ら
ウラ
裏
ぶをうきてびはぶうるぶるうのよ
表カラ見ル
オキノドクナ
やぶるうるうるるるるるよるは
モノナ
独言
あるねどぶるうるやうれるいあでみぶたあるはし
ウウレイ
デモ
うどぶとたくうるちをうぶへのるれんぶるう
ムヨカラマレ
クラキ
キノドク
きふぶちあのうるちあんはさたぶ明るうぶへまれば。
サ
朽

あ神よハふまさくんとしあつ〜さてもあ〜ハ行さのあつ〜おめ〜ふあ〜ぶつやあ〜ちあ花るとさせる
ることきさ花ことんちども　新これハかくあり〜とのこふて去分の詞ふとまるふハ〜ぶて亦花ハ紙のさこ花ふと
ハ〜ども人をあくハうつてあり〜とハ分ふて〜て引さ
あるを上を絵りてこふふあべんち〜こる絵く　釈ぶ花ふ〜ふ
秋ふ新〜ま〜てるめくいと絵ば花ふあ〜さまハ紙く新秋ふちこぶ〜てこ花ハ指き秋
〜さくあとふ〜ふもさいあ〜ぶ〜てあつ〜さてもあ〜と上へ人てふの詞ふひ〜ぶ〜こ花く巣をとま
こる八かちんくかき今ぬさふのことめをこ〜くとゆとこ〜あ
をこ〜くの月ぶげあ〜ぶを　明　風　ふ〜八表ぬのの初ぶべ〜源氏八月新あ〜で昔ふんあつく今ぬて昔月
ぶげあ〜ぶをだ〜りん花ち〜せ〜こるのふまてとふて〜こう花ちよぬぶ〜てこ〜ひ作りとあ文氏花の能
月新ふこのびくあをんともあ〜ふ〜の昔〜ぶこう今ぬハ花ふ〜もべ〜　湖面　ふひ合こるわ〜ぶ月
ぶげあ〜ぶをとふ〜つげて表ぬぶ花ふ事せこうとの
くまふあのこ〜　新かのあとふのハ分と紙ぬこ〜て表ぬこ〜こもさるかこふぬこもこる花
をこてぶ〜んやこふとふ新ふあり花でふのふおつ花れこてやこ〜ちんとこんやこる今婦ぶまこと源ふと
ふふんぶ〜こ〜うちぶれ上ふ花分のくふちこぶひふこと源ふと
ぶこう源こる儀きこをつふ事〜くふ指教よいこうこてこる
のこうまこもくこ〜ひ八酷ちくふふこうまこ〜こんあこの
やこ〜ことふつふ〜こふ〜れこう　釈ひこ〜ふハ源このこうまてこ〜こ〜こ〜こ〜ぶ一ぶ
んぶこ〜のこや　釈せハ男女のあ〜こひをこひくこ〜ぶ世分のこよいひあ〜こる
よ花ふハあ〜ぶぶこ〜　釈いとよくハあ〜ねぶ末梅ふのぶ今ぬぶこうのかいあでふぶ花ふ〜ふバせあてた
よこ〜こんとふ花ふくかふでハ筆こう知こる詞くと銭ふ花こ〜ぶ〜ふ〜ふ〜ぶ〜ふ〜ふ〜ふ

とどめんあつて。余殤 てつぶ。さもきまあさに。
かい移りこのあ 撥 練 好 ふされのうあひや見て法 朝 臭
らん。法つぶ。ハナ まつ分れいとをうしたこといへば。ツタ
茅ぶら汁 あるぐち形る法事うれ。この分ふハ。よかへ 元本 古系 今人 肥後
ムリヤリ るまふもなうめ。た近の系姫。ひごのうね
めやまぶらひつしんちどんもうびいひ
交
ろふぶうてまつちられぶ。やふた女 ヒタチノ宮
アフ
房つぶひてうんめでうか。
賞
集
源 あまぬ形を海ぶつる中の夜ふふうきよ
ていとぶ見りしんよやぶうきうみふすて 白 紙
かいまうしまもぶ。ゆくをうぶ形る。ぶたぶ

うく尋ぬべし。 花 政事要畧衛門府風俗哥云多々良女乃花乃如加以祢利好年夜減紫乃色好年夜 釈 さ
らめの花のしるかに樟ふそ樟ふそ花をふ川まへる風俗ぶ哥ハ減紫とありてケシムラサキとよめりされ
どこハかつあり小物てるあまこハ必減紫なまて色の淺く赤きうあるべしと云伴氏の説ふよりて今改めつ打消釋ふいふべし
みるされ山のをしめをしめ。 河 求子の分く春日社まてハみうさの山とうふ泉社まてハ各ケ所をうふくふ
河泉ハ源のんかふ所ふ傳云のをしめとうふひうくふひまふ泉社ハ宗祇云いわろ
八分ハ行あり志つひの臭れうの赤花をいうんうめ。末指ハ半法ふの姫ふ分ふ月ハせんこ云ふ山のをうめとハのこ
まふありうこうふ三笠の山れとのつのハ春日明神ハひうふ明神ハひうふ泉社ハ春日明神ハひうふ
浄神の社あまハをのこうあうふようかうふ体説の密伝く 釈 法物の説ども山ふまあくまうとハ
えうこれをやふ赤角と春日と同じ浄神ふまハといふこしよせありてやふ山ども多ふいと迂
まこれ法ふれうり安ふ花をふ川まへる風俗ぶの赤ふ河ふどなう〜を今ハ先ひくちしまめやくふあまり
まもあーんふ位〜つまう分とあるハ多〜良女よ求子をつさて分ひまへるをいふさうとものやまハあやふふまる
あるくまうやうく考へてさまもべ〜さてくらめふ花ふ山のをしめ
こふうくひ物の河ふうやくうとひまつせふ志くハやふ
志ぬハふをうしくふ 釈 命ぬハ分のうをひとうれまうたまう
ふまつ。 釈 そのうをひぬ女房つまハ山ひくふ
あーぶをまれ志物ふ 釈 命物ぶこうていふあーびいハ
あくふかの風俗ぶにうのあくふのひといふんふれうの
さてぶ源氏ハつまうふうこひふひふるべきとをうーとうひくうこうるくふ宗のうこづくをれよ
うけうることハうちうん。 釈 撥練のういハ俗の袋浄まて練ふる絹の名あうーを物りてハ火色の深色をさして撥練 カイネリ ヒイロ
うふ物りこのあ
とくりこの風俗ぶあるも法ふをさーていふくふ春くハ館物ふいまをとうべーさんこくふくうめくとうくハで
物の分ぶ河ふうくふまてまてふふきうあーかいれりのあ
法でまうふあの 釈 分をきれぐふうこうふまて今俗ふ
あるぐちあるふ中ーふ 釈 俗の女房ふちの河くてれハあ
ムリヤリ

人くの中ふハとのさえ　ありつるまゝのもとハあら赤紙　釈　此二人の女房うちの
方との今始把持の采女や　きぢうそのうつゝんあぐりの末摘花おもをんなを
ぬぎ　湖　今宵婦海の底ぬらをを末摘へなりうつるあり
ぬるよハ女房つぐしく　岷　まつむのうらなくくしうとりてうてるる
あくぬ数をうゝ　抱　指さ衣ぐふゆよりあり　末摘花ようゆうゝ衣のうゝまてよしまゝへるゝ
ゝとやゝといつるうていゝく　釈　花をふゝりゝ人く捨さ条の方れ詞を用めて
ゝゝく亜ぬ数とかきさてこいゝ徳稲あり結ぬハわるよゝやのえうまてゝぐひふるる
お花や設のふもんんとあゝなぐゝるハさうゝ　釈　出ぬてゝるるとうゝ同
すてういゝるゝもぞ　抱　源氏光の手料とてゝ人のまのゝをるきぬをさわぐゝ末摘の方へやうゝふゝり
ぬきゝとて人のれる　河　衣服今之義解曰蒲萄　蒲萄者紫色之最浅也　釈　蒲萄
えびそめ　湖　参ぬぐんゝ末摘のおゝろうゝのををぐきて源の五ゝをなりゝふゝるゝ
山ぶさるゝゝぞ　釈　山吹ハ黄色ゝ浅あり　釈　蒲萄の黄れるゝゝ
あゝゝゝとあひを　湖　参ぬぐんゝ末摘のおゝろうゝのををぐきて源の五ゝをなりゝふゝるゝ
ゝとゝとゝくれあのれ　釈　末摘の方れ老女房どもの批判をるゝうゝとハ末摘ふゝうゝなりゝる衣のゝとゝ紅の
おもくゝゝうゝゝとハ今やゝゝゝゝ後ゝゝまでゝくまでふゝハ色ゝゝの重くゝきといゝさ
さゝゝもきゝゝとゝ　玉補　此下ふぞとゝうあるべゝ　釈　きゝぞとハゝとゝひのけおさまそゝもゝのゝあり
ゝゝゝゝをいふさゝゝもゝるゝの衣もゝゝゝゝゝまゝとゝいゝあり
ひあゝもゝおゝゝゝげゝゝで　釈　末摘ゝも大ゝゝあゝゝゝゝゝ

踏元日の朝ごとに。
踏元日の朝ごとに。
男踏元日の朝ごとに。
男踏元日の朝ごとに。
男

釈かるんつさるたにすもひ男の調度などハあるまじたとあれ
ばよろしくとてくなどろハされ
ろとおぼしく
あらしとこのんぞんを
画 あるとうにほうりまれし
衣者をとのまつめとあり
釈 ゐぐくハんざしとゐんぐめ
さもおぼしあり
潮 源氏ようちもうひ 紫式部とて
のまく末摘のめしるも源氏
ハおぼしあるしぐり
けるあるんつまて 潮 点ある
故のけやとふつたてあやく
源氏ちうろるよ仏ろと源の
んをつけまるく
まるる ねハさしおれて
河 捨 おしの年五くるあ
ようまるる おハるぐひまあり
釈 ちのこ五ようハ先末摘花はた
ゆるしたあるまりておひ
ちんあるのゆりたと
さんぜるちハと 河 寄めるあ
さへる者ハおぼしたあるまれも

ぢんぐたの志ぐけるをたくろひ行ふ。
髪 茎 ミダレタル
ワケモナク 古 鏡
あ。かるふるあいるきやうだいりくし
唐 櫛
重 撥 上 函
をとこのはぐさへおのくある後ぎきく
チラく
をとんすふ。女のはさくぐくふハよぐ
ホツム 異本うちの
きるちとみゆふ。ひうしたこのこ後ぐくを。
宮
ちしぐくうなるるうつ。ぐとおぐ。よくぐ。
ソノマヽ 奥 源氏
けあるもんつきて。ちるたうぐぐバうう
紋 イろ 著 表著 源氏
ぞ。あゆとはおぐくるこゆくぶぐ。
今年 声
きうくきるせるくりまるくめのハさし
少 待
おうれくはうたのあるまるんあんゆう

ようぐぐうるく 釈 あるさ
まるんとあるふつけてはう
の初をといひ生まるくとあ比
おうろハぐうるふあるふ
るひるるさまる 潮 られぐう
ゆくといんをのぐかるる末摘の
初を皇下してのるまく
さうやくあるるるくよ
釈 さうやハ然有といふとゆて
やハいひすてのやくられぐふう
ゆくといふをうけて然有ちうは
のさまるも年を経めるる熟ぐと
てうるひるめて
若うとぐぐるる 河 ちれてハ
ゆあうとぐるるおもいきやる
ふるるけてるるるんとハ伊勢物語
釈 此ちのこるるとんうと
うてんをるハ伊のこふるる
うんとてのてるる一巻を四
ふるるけてというの初をるの
のるるをふるわるるるとい
うう奥へるふをるるおハさる
ふるるぐひうるとく
るるかい 拾 五葉才九云八年

しるたとのるまへだけへづ春ハどからう
おぐくるるるるいぐるるるさるやぐるん
コトデ 原河 ハカシ ソウギヤ 年 経
めるるるるよとおわるひるひるく春とる
ぞみるぐとうちずていぐるるをんちく
イろふ 誦 ンぐ
るるるうひるるるるるちおおひのそバ
コトデ 原河 ハカシ ソウギヤ 年 経 ヨリフシ 覆 ヨコ
めるるるるよとおわるひるひるく春とる
ヤハリ
めるるるぽるのるるるるるるるるるとふるひ
ガホ
やるるるるるるるるるるるるるるるるとる
おぐぐるるるるるるるるるみぐるるるのるるやと
片 生
のるるるいるるるるるるるるるるるるるるるる
なるるるるるるるるるるるるるるるるるるるる
如此 無紋
るるゆるるるるるるるるるるるるるるるるるる

うにきるゝ成てぞふんもあるてゆの
ゝ
ぞ
ゝ
ぞ
ゝ
ぞ

[illegible]ハ二条院へ[illegible]世[illegible]ふ[illegible]
[illegible]ハ必世[illegible]
[illegible]ハ俗の男女行幸のように[illegible]
[illegible]
[illegible]

釈 赤梅花のうちをうなるあり
あるべかれを

釈 あるべかハ紅花にて即紅粉のなり必俗ハ藍バナ[illegible]
うきつけ[illegible]

釈 さてしらのすり[illegible]

釈 つけるる紅粉のさ[illegible]

釈 のべ[illegible]

釈 世[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

○四十一終

あくうちう（ムツガラ）れもふあれいとかう（カヤウナ）。うる
ん〜れもとぐ（末々）ぐいうるかうまん。

〜るべ〜さ〜でハ〜〜梅の事を
ありていうう〜〜花に咲さを花
まぶるハいう〜
いでやとあいうく〜う〜

歌 お梅のをよう末梅をををハ
いで〜いいうのくあくあられすあを
咲さてハ末梅花のさを後ろを主書月ばこの事をもて侍まこう結局くあるとうべ〜
あおいう〜〜 歌 花ちをおいまをこる年又万歌一歌年ぶ〜ようて補ひ此ものれをもハうう〜歌せるこ
末梅花めひさす〜をひれ〜されすあを作者のこをけあいおびる何うてうるの〜〜ゑをべき事べ
あう〜〜れを花ぶく 歌 あう〜〜とハ末梅ゐハいあもさ〜〜宇陳彩深歌をく〜かうまあて〜〜ようとあ〜〜う
こまこを花をて末梅をを〜〜いへるはいうあひう〜〜〜